資料３

第４回高松市創造都市推進審議会　摘録

日時　平成２５年３月２３日（日）１４：３０～１６：３０
場所　高松市役所　１１階　１１４会議室
出席　委　員：佐々木（会長）、中（副会長）、大久保、大西、木村、瀧澤、佃、徳増、中西、西成、原田、松山、三井、三矢、藪内
高松市：宮武、松本、秋山、米山、永正、長井、山崎、上枝、佐野、溝渕、高田、八杉
アルパック：森岡、江藤

１．開会

事務局より開会の挨拶を行った。

２．審議会、懇談会（U-40）の経過

事務局より説明を行った。

３．高松市創造都市推進ビジョン骨子案（修正版）の検討

事務局より説明を行った。

（意見交換）

委　員ｏ創造的人材の集積について、こどもだけに焦点を当てるのではなく、高齢者も含めた全世代を対象に、生涯教育をめざして欲しい。

会　長ｏイタリアでは保育園と老人ホームが隣り合わせになっており、互いに交流しやすい環境になっている。こどもたちとの交流を通じて、社会経験や技術を高齢者が伝える機会を作ってはどうか。

委　員ｏ我々がこどもの頃には、よく海や川で遊んでいた。交流空間の欄に「海園」の視点を充実して欲しい。

会　長ｏ海園・田園は良い言葉だ。海園をより具体的に描けると良い。

委　員ｏ高松市創造都市推進ビジョンは産業政策系の部署が担当しており、こどもや福祉、環境は別部署の担当である。しかし、創造都市のコンセプトは、市の様々な部門が横断的に取り組むことにある。産業政策系の部署だけに限って話を進めると、論点がずれてしまう。

会　長ｏ私の理解では、ビジョン策定段階では産業政策系の部署を中心とした話になるが、次の段階では他の部署も巻き込んでいくイメージを持っている。

事務局ｏスタート期は、文化政策と産業政策の融合を図っている。具体的には、芸術士を保育園に派遣しているが、「文化政策」から見ると、文化政策に親しめる環境を０歳児にも提供でき、「こども」から見ると、良好な教育環境の中に芸術がある。このような形で波及させていくイメージである。

ｏ例えば、玉藻公園の披雲閣で行っている「おもてなし庵」事業は、盆栽や漆器、陶芸、料理と重要文化財を組み合わせて、アトラクションに入っていくような楽

しみを創出している。その日のためだけに作られた漆器や料理を、歴史と伝統を踏まえた由緒ある建物の中で楽しめるものは、今までの観光振興や文化振興の中では無かった。

o 総合計画は芝居における台本である。実際の出来は役者の力量、つまり各部署の働きによって左右される。

会　長 o 骨子案１ページの図の書き方が今の事務局説明通りになっていない。創造都市推進局が中心にあり、その周りにこどもや福祉などがあるような図に書き直してもらう。

委　員 o 次世代に向けて、高松市の秘伝や芸術、文化を見直し、経済と融合させた中で、心の豊かさを創造し、人々が挑戦し続ける高松市にするイメージを持っている。行政は互いに関連し合っており、それぞれがやっていることをまとめたものが創造都市と考えている。

会　長 o ５年、１０年経つとどのような形で推進していくのかが描かれていると分かりやすくなる。しかし、現段階では課題にしておきたい。

委　員 o 行政が横断的に動いてもらえるのか、やはり不安が残る。アメリカでは、災害発生時には危機管理局が全権限を握り、横断的な危機管理体制が整備されている。チャイナセブンではないが、「高松ファイブ」のような組織を作り、局をまたいで創造都市を推進する体制を作ってはどうか。

事務局 o 今の体制では、他の局長に働きかけて、彼らの施策の中で創造都市を推進してもらうことが現実的である。

o 創造都市推進局のそれぞれの部署に役割があり、自分たちの施策はしっかりと連携させて進める。それを見た他の局を啓発するような形であれば、他の局を動かしやすい。

委　員 o クリエイティブ高松はこの審議会で議論されたものになるが、具体的に来年度から何をやっていくのか。また、６つの主なプロジェクトはどのような位置づけで進めていこうとしているのか。全て進めることが出来ないのであれば、優先順位はどのように付けるのか。

o 審議会のメンバー数名で具体的なプロジェクトをより具体的に考えてはどうか。

事務局 o 議論の流れを踏まえ、先取りして様々なことをやっている。一般的な創造都市では、文化芸術に代表されるクリエイティブなものをまちの活力向上に貢献できると考えており、特にアーティストからの“ひらめき”でプロジェクトが提案され、実施することで成果に結びつくことが多い。とにかく提案されたことはやってみて、点がいくつかできれば線で結んでいき、最終的には面になっていくイメージである。“ひらめき”に頼るのも１つの手段だと考えている。

会　長 o 例えばＮＰＯに創造都市の事業を行ってもらい、成功すればそのまま継続してもらうなど、創造都市に係る社会実験を実施するＮＰＯを作ってはどうか。クリエイティブ関連の国からの予算措置が徐々に増えているため、行政だけでクリエイティブ拠点を作ろうとするのではなく、民間との協働にも目を向けた方が良い。

o 金沢では、市民からいくつか提案があり、上手く行ったものには行政が支援して

いる。創造都市は３年で終わるわけではないため、続けていくうちに拠点となるものが生まれてくる。審議会では、「これが良いから伸ばしていこう」と議論していくのが良い。

委　員ｏ金沢の事例は、２１世紀美術館が出来たから成功したと聞いた。民間のボトムアップで可能な部分と行政との関連について教えてもらいたい。

会　長ｏ１０数年前から、「新しい芸術作品を展示している美術館が欲しい」という市民の声があった。それを受けて市長も意思決定した経緯があり、様々な積み重ねがあったことは大きい。具体的には、金沢大学の施設が移転した跡地活用についての委員会が始まり、どのような美術館にするかという議論になり、市民芸術村の革新的な手法を持ち込むなど、継続的に意見を積み重ねてきた結果である。

ｏ瀬戸内国際芸術祭が継続開催になったことは、高松市にとって追い風である。今年が終われば、次は３年後になるため、その間に観光などのあり方が変わってくる。その変化に対応していくことが審議会の役割である。

委　員ｏ一番大事な目的は地域振興であり、観光や芸術振興だけでは地域課題は解決できない。先日開催された２回目の瀬戸内国際芸術祭の開会式で、一部の方々から「本当に地域のことを考えているのか」と批判を受けた。

ｏ創造都市のビジョンが、他の局の施策にとって、価値判断の軸となるようなものにしてもらいたい。現状では、本来めざすべきところとかけ離れたものになる恐れがある。

委　員ｏ高松市農業振興計画、高松市観光振興計画など、それぞれの分野で計画があるにも関わらず、「それはそれ、創造都市は創造都市」と分かれてしまっているように思える。他の計画において、それぞれの分野の問題や解答が既に出ているのではないか。分野ごとに計画を作る時代は終わっている。

会　長ｏ高松市の上位計画・関連計画の中のいくつかを拾い上げる形で、主なプロジェクトに組み込まれている。そうすることで、それぞれの振興計画に影響を与える形となっている。

事務局ｏまだまだ変更があると想定しているため、もう少し各事業の内容を詰めた段階で他の振興計画との整合性を取りたい。

会　長ｏ初年度は総合的なビジョンを固めて、次年度からは具体的な事業を動かしながら問題点を検討する、ＰＤＣＡサイクルをイメージしている。

委　員ｏ次年度から副市長が危機監理監になるとのことだが、（創造都市が進展していけば）副市長がまとめ役となることもできる。

ｏコンパクト・エコシティの推進は、超高齢化社会に向かう中で、いかに持続的な社会を作っていくのかをめざしているのではないか。

事務局ｏそもそも論になるが、日本は人口減少社会に向かっていくことは間違いない。その中で活力あるまちをめざすために、コンパクト・エコシティは重要なハード面での考えである。創造都市はそれと全く同じ考えからスタートしており、交流人口の増加は定住人口の増加と同じメリットがあり、魅力あるまちづくりをすれば外から人々が来訪し、まちは活性化するというソフト面での考えである。

ｏ今は局が分かれているが、お互い情報共有して、関係のない施策を進めることが

ないようにバランスを取るようにしている。

副会長ｏ主なプロジェクトの取組イメージについて、実施中のもの、実施できる段階にあるものを教えてもらいたい。

農　林ｏ食について、「新規就農者の確保・育成」は本年度から給付事業も含めて取り組んでいる。書いてある通りではないが、市内産直などいくつか取組を始めている。

文　化ｏ祝祭について、瀬戸内国際芸術祭は開催中であり、来年には高松国際ピアノコンクールが開催される。また、夏期間・秋期間にまちなかでのコンサートなどの行事を展開する予定である。

ｏこどもについて、条例制定を進めている。また、学校への芸術士派遣、伝統芸術教室の開催などを行っている。

観　光ｏ国際会議について、高松コンベンションビューローを通じて、国際的な会議・シンポジウムを誘致している。飲食施設・宿泊施設との連携によるサービス充実やオプションツアーの実施も高松コンベンションビューローと連携して進めている。

ｏ交流空間について、各島々への観光客数は予想を上回っていたが、内陸部への観光客は減っていたため、香川県との連携により「時間旅行物語」という観光ルートを開発予定である。

ｏ祝祭について、むれ源平石あかりロードは第９回を開催している。また、国際芸術祭の春、夏、秋のサイクルに合わせて、玉藻公園を夜間無料開放し、販促活動の一環として石あかりを約５０作品展示・販売している。

商　工ｏ生活工芸について、実証している内容を記載しているが実施はできていないものがほとんどである。現在「ものづくり基本条例」の制定を検討している。また、次年度からは美術館カフェを実施する予定である。

会　長ｏ施策・事業を「事業化が進んでいる」、「計画段階にある」、「検討中」に整理すると分かりやすい。

委　員ｏ横浜市役所の若手職員と意見交換する機会があり、「こうやったら失敗した、しかしこれだと成功した」と彼らは皆熱く語っていた。横浜市では職員が市民を巻き込みながら、トライアンドエラーを繰り返している。そこで、具体的な提案として、他創造都市の職員と高松市の職員の交流があれば良いのではないか。横浜市の若手職員は高松市のクリエイティブシティの話に興味津々だった。

事務局ｏ広い意味での人事交流は実施している。具体的には、岡山市と人事交流を行い、また、条件が合えば国に派遣している。ビジョンに記載されれば、より動きやすくなる。

会　長ｏ７つの政策指標の⑦創造的ガバナンスに関連することである。また、「５．創造的アプローチ」の創造都市ネットワーク日本（ＣＣＮＪ）において、職員が互いに交流することで能力を向上させていこうという話がある。ＣＣＮＪの事業の一環である「創造都市政策セミナー」は、全国や海外の様々な事例から学ぶ場であり、発信だけではなく受信もできる。

委　員ｏこの審議会を恒例にしてもらい、高松市は現在何をやっているのかを確認する場にして欲しい。

ｏ我々は委員である前に市民である。我々が発信役になり、創造都市に係る情報を発信していきたい。

会　長ｏ大変重要な意見が出た。高松市は数多くの事業を行っているが、市民の目線では一部しか見えない。一方で高松市のフェイスブックのページを見ているだけで、たくさんの情報が出てくるため、このような方法で情報を得てもらうと良い。フェイスブックのページを印刷して配布するだけでも十分だ。

委　員ｏ皆も実感していると思うが、団体バスを殆ど見なくなった。その代わり、コンベンションが増えている。最近は「ＭＩＣＥ」という言葉が使われており、会議（Ｍ＝Ｍｅｅｔｉｎｇｓ）、視察（Ｉ＝Ｉｎｃｅｎｔｉｖｅｓ）、コンベンション（Ｃ＝Ｃｏｎｖｅｎｔｉｏｎｓ）、展示会（Ｅ＝Ｅｘｈｉｂｉｔｉｏｎｓ）のことである。そのＭＩＣＥを政策として４つに分割して誘致することが、業界では当たり前となってきている。コンベンションをＭＩＣＥに置き換えてもらうことで目を引くものとなり、「ＭＩＣＥ」が高松市に定着し、創造都市になる。

委　員　ｏ課題と取組の関係が分かりづらい。課題は７つ設定されているが、具体的な進め方は４ページに書かれており、どのようにつながっているのか。創造都市のイメージをいかに市民に定着させていくかが課題である。

会　長ｏ各分野の振興計画や第５次高松市総合計画との整合性、創造都市ビジョンがめざすものについての説明を分かりやすく充実させることが必要である。

委　員ｏ通常の研修や講習会を開催するのではなく、外に行ってＯＪＴで様々な情報を集めて持ち帰り、皆に伝える研修や講習会を作って欲しい。

ｏ一般市民にも分かりやすい言葉で伝えることも重要である。

委　員ｏ一次産業は高齢化と後継者不足が深刻な問題である。日本の食を是非大事にしてもらいたい。

委　員ｏ香川県との連携がどうなっているのかが分からない。

ｏ全体として意味の解らない外来語は控えるべきとヒアリングで伝えたが、改善されていなかった。

会　長ｏ該当する用語には、ルビや用語集を付けてもらう。

委　員ｏ外から交流人口が増えることで、活性化につながるイメージは湧いたが、中から産業を生むという話がない。中から産業が生まれることで、創造都市になる。

会　長ｏ今回は問題提起とさせていただき、次年度の審議会の中で、各論として掘り下げさせてもらいたい。

ｏ今回は事前に意見を伺っていたため、全体的にバランスの取れた議論であった。最終的なまとめや表現については私が監修する。

（以上）